

猿新聞

謹賀新年

謹んで新春のお慶びを申し上げます
本年も何卒宜しく
お願い申し上げます
令和三年元旦

生き物の交通事故死 ロードキル

（前号からの続き）
日本の中山間地域では、幹線道路沿いにも山が迫り、道路脇に動物や鳥類が頻繁に出没し、野生動物のロードキルが多発している。自動車安全運行上問題に
なっています。

ロードキルとは、「主に鳥獣が道路上で車に轢かれる事故を言いますが、車に轢かれるものだけでなく、側溝など道路構造物に落ちた場合や道路照明灯に衝突した場合など、道路に起因する野生動物や昆虫の死傷を全て含めてロードキルと言う場合もあります」。ロードキルは、絶滅危



シカは、群れで行動するため、先頭の1頭が飛び出すと、後続も盲目的に飛び出してくる。（乗りものニュースより）

慎種や希少動物など貴重な動物を減少させる原因のひとつになっていく動物が犠牲になっているため自然生態系の保全の観点から問題視されています。また、自動車安全運行上の問題ともなっています。日本は山国で、道路建設時、生息域の部分的消失や分断・阻害など野生動物の生息域環境を破壊しています。これが、ロードキルを引き起こす原因となっているのです。

中山間地域では、幹線道路沿いに鳥獣が頻繁に出没し、ロードキルが後を絶たず、特にシカなどは躯体が大きく、自動車との衝突が生じた場合には、人命に係る事故に発展し車の損傷や、死傷事故となったケースも多々報告されています。人間側の被害が甚大です。

実は日本では、年間約10万件におよぶ野生動物との接触事故が発生しているそうです。シカでは、年間発生件数の約38%が繁殖期の10月から11月にかけて発生しており、時間帯では70%以上が16時から24時の間が多いと言われています。高速道路の落下物の7件に1件が事故死した動物の死骸だとも言われています。

今後は、道路への飛び出しを避けるためのフェンスの設置や、高速道路を中心に道路の下や上に動物が通行できる専用の設備を設置するなど、交通安全確保だけでなく野生動物保護の面からも様々な対策が必要な課題となっています。

シカの交通事故の理由のひとつと考えられているのが、保護政策や環境の変化などによる、生息数の激増です。早急な個体数管理が必要な状況にあります。また、冬期に道路の凍

結防止に撒かれる塩化カルシウムを舐めに来る事故に遭う。鉄道事故ではレールについていた鉄粉を舐めに来て列車に轢かれるなど、両者とも自然界には少ない鉄分などミネラルを簡単に摂取できるので、それを覚えたシカが道路や線路に出て来て、自動車や列車に轢かれるという事故が多発しています。更に、冬期道路法面・線路築堤などの雑草を求めて出没し事故を引き起こしています。シカの餌源となる雑草を減少させる対策が事故減少に繋がります。そこで、地域やその年の天候にもよりますが、草の冬枯れを促す適切な時期に草刈りを実施することが重要になります。

普段、あまり気づかないですが、照明灯に衝突する昆虫や野鳥などのロードキルは日常的に発生していて後を絶ちません。ロードキルの犠牲となる最も多い野生動物はタヌキと言われている。全体の40%に登ります。タヌキは、驚くと丸まって動けなくなる習性があるため、事故の犠牲となることが多いようです。

次に道路照明灯に衝突などの鳥類のロードキルが27%が続きます。空中での飛行機との接触、バードストライクなどもあります。更に、U字溝などに落下し、這い出せず絶命するウサギやネズミ、カメ、サワガニなどの小動物をロードキルから未然に守るための「這いだし口」の設置など、バリアフリー対策なども今後の課題となっています。

道路管理者（行政）は、シカなどの衝突事故を防止し、より安全な道路サービスを提供するための施策の一環として啓発活動を行うと共に、ハード・ソフト両面から、安全・安心な道路サービスの提供に努める義務があります。反面、ドライバーも事故が起こることを予測し、慎重なドライビングを心がけることも重要です。

皆さん、黄色地に黒縁、黒模様でひし形の「警戒標識」をご存じだろうかと思えます。そこに描かれる動物の多様さには驚かされません。シカ・タヌキ・サル・ウサギ・カメ・カニなど……。

運転中にこうした警戒標識を見かけたら、より一層注意深く、慎重なドライビングを心がけたいものです。しかし、どんなに注意をしても相手は動物、どこに潜んでいていつ飛び出してくるか予測することは非常に難しいです。

シカとの交通事故を防止するには、シカの生態や習性を知ることが大切です。シカは車が近づいても逃げないことがあります。道路上のシカは、車のライトや走行音に反応して立ち止まることがあります。また、アスファルト上では蹄が滑ってしまい、逃げるのが遅くなることや、焦って転ぶこともあり、道路上では動きが鈍く自動車を機敏に避けられず、衝突すると言われています。

また、シカは、群れで行動するため、先頭の1頭が飛び出すと、後続のシカも盲目的に飛び出してくる可能性があるため、1頭の飛び出しを確認した後も警戒を怠らないことが必要。シカの活動のピークは日出と日没前後で、周囲が暗くシカに気付きにくいので早朝・薄暮の運転には特に注意が必要です。季節的には9月～11月頃は鹿の発情期です。特にオス鹿は、非常に気が荒く、また、5月～7月上旬までは鹿の出産、子育て期です。メスシカは、出産前後は神経質になっ

ています。この時期は特に気をつけて走行してください。夜間の走行時、車のヘッドライトが反射するとシカの目が光ります。暗いときに光るものが見えたときは、シカがいるかもしれませんので、気をつけて走行してください。夜間の走行時は、できる限りハイビーム。ハイビームにすると遠方でも動物の目が光って発見しやすくなるので、対向車に気をつけつつ、ハイビームを積極的に使いたしましょう。運悪く実際に事故に遭遇した場合の処置。当事者のドライバーや同乗者はパニック状態でも、何も出来ないというのが殆どだと思えますが、警察に一報を入れ、後続車や対向車の二次災害防止処理を執ることが重要です。損害保険大手の損保ジャパン日本興亜によると、野生動物には賠償責任を求められる相手がいないため、単独事故として扱われることが殆ど。イヌやネコなど動物との衝突事故は基本的に「物損事故と同じ扱い」となり全

ての損害をドライバー側が負う事になります。自動車保険は適用されるものの、車両保険に入っていないと車両の損害は補償されないので、仮に衝突のしついでに物や人に当たった場合、その責任は事故を起こしたドライバーに発生するといえます。ロードキルの要因を、道路建設時の獣道の分断など生息環境の破壊と見なすなら、今、日本の溪流河川でも魚道が無くなるなど川辺の環境悪化が進んでロードキルと同じようなことが起こっています。日本には、サケが生まれた場所へ遡上する溪流がたくさんありますが、戦後の高度成長期、産業や治水目的の井堰やダム建設などにより魚道が破壊され、サケ、マスなどの母川遡上が困難になっている溪流河川が増えてい

（2面上段に続きます）



ダム建設により設置された魚道 関東地方整備局

講習会開催

出没が多く学校関係者や保護者が、児童の登下校時の人身被害を心配されています。名張

（1面から続く）
ます。また、森林源流域に建設される治山ダムや砂防ダムが、河川環境を荒廃させ、サケなどの魚が産卵場所を失うなど河川流域の生態系を破壊していると言われています。
経済成長期、治水のための河川改修により自然豊かな多くの溪流が、3面をコンクリートで固めた、ただの水路と化し、日本各地の河川では、希少な淡水魚類が絶滅の危機に瀕しています。

現在では、出来るだけ自然環境に配慮する方向に考え方が変わり、ダム建設による魚類生息環境への影響の軽減や、既設ダムによって失われた環境を回復することを目的とした、魚道の設置が全国で進められています。

令和2年7月頃から、滝之原や隣接する「すずらん台」に20数頭のサルが出没。滝之原地区では、農作物被害や生活環境被害が発生しています。すずらん台地区では、スクールゾーンでの

令和2年11月28日、サル群の出自についての調査結果と、今後の対策に付いての研修会を、三重県伊賀農林事務所伊賀地域改良普及センターと共催で、滝之原公民館において開催いたしました。
新型コロナウイルス禍の中、週末の午後7時という出にくい時間帯にも関わらず、50名余りという多数の参加が見られ、地域住民のサル対策についての、関心の高さをうかがい知ることが出来ました。

名張市農林資源室 講演者 仙頭 賢氏
講演内容（概略）
■名張市に存在するサル群の現状
・名張市内では2つのサル群が存在。
名張A群
名張市南東部29キロ平米が遊動域。個体数約21頭（令和1年度調査）
名張B群
名張市西部宇陀市室生45平方キロが遊動域。個体数約10頭（令和1年度調査）

伐採費用5,000円まで助成。
名張市では今後も野生鳥獣への対策は進めていきますが、それには皆さんの協力が必要不可欠です。今後ともご協力をお願いします。
令和1年度調査（A群）
オトナオス……1頭
オトナメス……11頭
ワカモノオス……1頭
ワカモノメス……3頭
アカンボウ……5頭
③個体数調整
モニタリング調査の結果と前年の捕獲頭数を元に捕獲頭数の目標を設定する。
テレメトリー調査のための捕獲と併せて実施する。

現在、滝之原地区では2カ所に捕獲檻を設置し捕獲に努めている。名張A群の捕獲は30年7頭、R1年2頭、H30年7頭、R1年2頭、④不要果樹伐採
⑤群れで動くが、行動はバラバラ。
・生活や繁殖の特徴
①群れで日中に移動。
②寿命は20歳程度。
③最初の出産は6〜7歳。
◇効果的な被害対策
・取り組むべき4箇条
①無意識な餌を無くす。
②隠れ場所や逃げ場を減らす。
③正しく囲う。
④集落ぐるみで追い払う。
「集落を一つの農地と意識して」「効果がある集落ぐるみの組織的な追い払い」
三重県内には、約120の群れが存在すると推察されていて、サルによる被害発生集落はおおよそ700集落で、そのうち半分は被害が「大きい」「甚大」と感じています。



滝之原の民家の屋根にサルの群れ
写真提供 名張市農林資源室 加工して掲載

三重県伊賀農林事務所伊賀地域改良普及センター
講演者 中圭史氏
講演内容（概略）
■サルの被害対策
◇生態を知って被害を防ごう
・身体能力・行動の特徴
①記憶力が高い。
②運動能力が高い。
③視力が良い。
④いわゆる「ボスサル」は居ません。
⑤群れで動くが、行動

名張A群では、7月頃から滝之原地区、すずらん台地区に、20頭ほどのサルが出没し、農作物や家屋侵入などの被害が出ています。調査の結果、どうやらこの群れは青山群の分裂の片割れだということが判明しました。その後三重県との協議の結果正式な名を青山B群とされ、今後は名張市が行動を調査していく方向となりました。これに伴い、滝之原地区では発信機装着個体の捕獲を行っています。出没が極めて多くなることが予想されますが、捕獲までは、追い払いなどは控えるなど地域皆さんの協力が必要です。結局、名張A群エリアには2群が存在するということです。名張A群については今後、両群がどのような被害が心配されます。サルを誘引している原因を突き止め、早急な対策が必要です。

サル出没状況
名張A群では、7月頃から滝之原地区、すずらん台地区に、20頭ほどのサルが出没し、農作物や家屋侵入などの被害が出ています。調査の結果、どうやらこの群れは青山群の分裂の片割れだということが判明しました。その後三重県との協議の結果正式な名を青山B群とされ、今後は名張市が行動を調査していく方向となりました。これに伴い、滝之原地区では発信機装着個体の捕獲を行っています。出没が極めて多くなることが予想されますが、捕獲までは、追い払いなどは控えるなど地域皆さんの協力が必要です。結局、名張A群エリアには2群が存在するということです。名張A群については今後、両群がどのような被害が心配されます。サルを誘引している原因を突き止め、早急な対策が必要です。

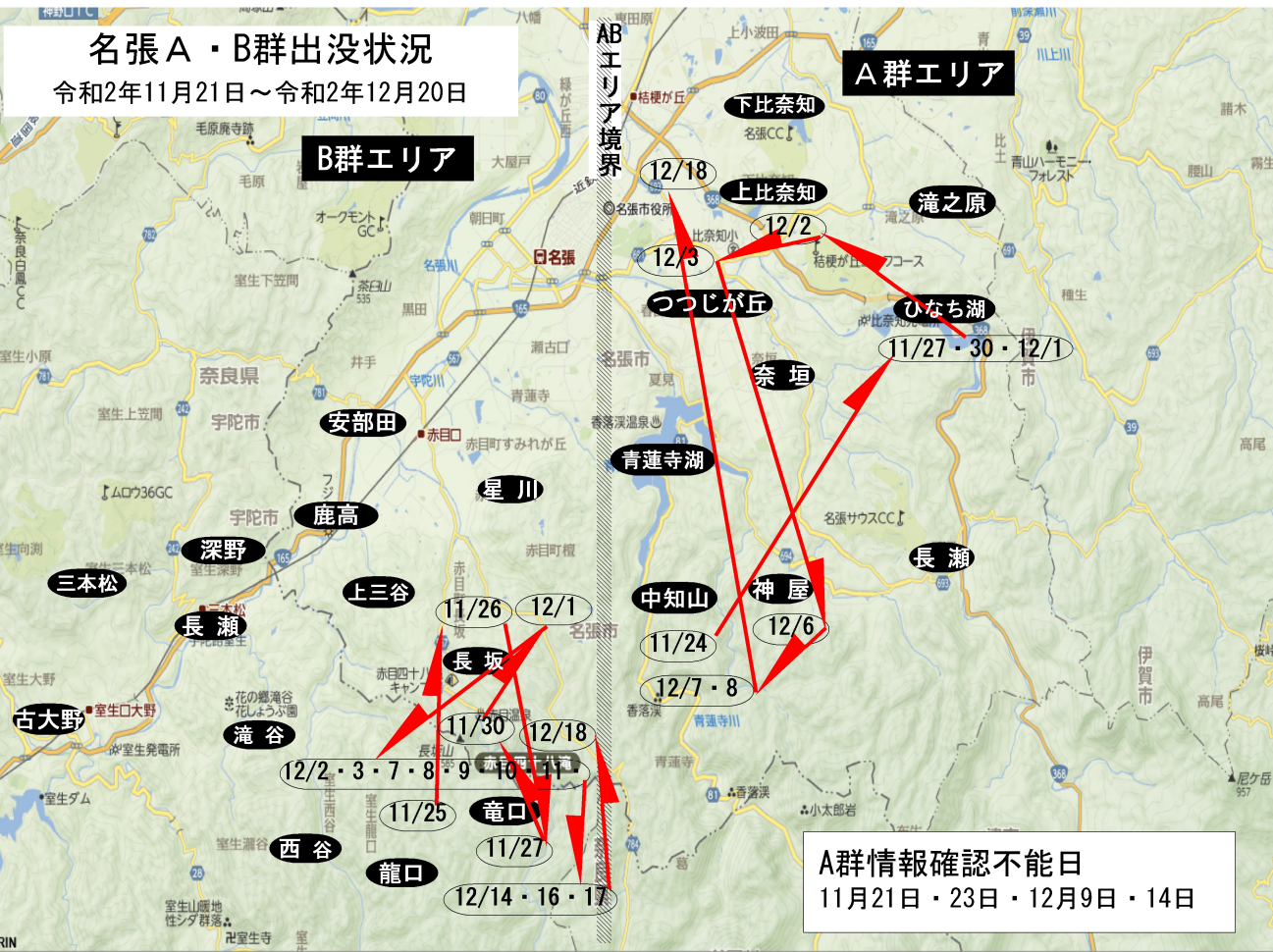
キジ放鳥

名張市立薦原、比奈知の両小学校の児童が、昨年11月9日、学校周辺でそれぞれキジの放鳥を体験しました。市猟友会が協力する毎年恒例の自然学習で、児童はふ化から3カ月前後のキジを放ち、優しく見送りました。キジの放鳥は約20年前から、旧市立滝之原小で実施。同校の閉校後、薦原、比奈知の両校に引き継がれています。今年も岐阜県で育てられた計約40羽を放鳥しました。

「初めは怖かったけど、放すまで待っていると慣れてきて可愛く感じた。」「キジを持った時バタバタ暴れて、生きているという感じがした。」



写真提供：名張市農林資源室
(田北 利治)



名張A群では、7月頃から滝之原地区、すずらん台地区に、20頭ほどのサルが出没し、農作物や家屋侵入などの被害が出ています。調査の結果、どうやらこの群れは青山群の分裂の片割れだということが判明しました。その後三重県との協議の結果正式な名を青山B群とされ、今後は名張市が行動を調査していく方向となりました。これに伴い、滝之原地区では発信機装着個体の捕獲を行っています。出没が極めて多くなることが予想されますが、捕獲までは、追い払いなどは控えるなど地域皆さんの協力が必要です。結局、名張A群エリアには2群が存在するということです。名張A群については今後、両群がどのような被害が心配されます。サルを誘引している原因を突き止め、早急な対策が必要です。